

〈原 著〉

青年期から成人期の対人的枠組みと対人的認知

—19年後の縦断的变化—

山岸 明子*

A 19-year longitudinal study of internal working models and cognition
of interpersonal experiences from adolescence to adulthood

Akiko YAMAGISHI*

Abstract

The purpose of this study was to investigate the stability and the changeability of interpersonal framework and interpersonal cognitions related to internal working models (IWM), using longitudinal data obtained from late adolescence to adulthood when interpersonal environments changed greatly. Participants were 15 females in their forties who had been nursing students in 1990 and responded to the questionnaire in 1991. They answered almost the same questionnaire which included Hazan & Shaver's items of IWM, egograms, the cognition of their parents' attitudes, the sense of adaptation which they had in each period from past to present and several scales of adaptation and satisfaction at the present time. Nine participants were also interviewed about their situation and their way of life thereafter up to now.

The main results were as follows: 1) Correlations between the scores of the two times were fairly high, even when 19 years had passed. 2) As to the scores of adaptation from past to present, there were few whose scores had changed much without in infancy. 3) Regarding the total scores of IWM of the two times there were some whose scores changed little, but on the other hand, nearly half (7 persons) of their scores changed much. 4) Analyzing the feature of 4 groups that were classified as to the total scores of IWM, high scoring group, rising group, declining group and low scoring group, showed that a) Score changes of A and CP in egograms were seen in the rising group and the declining group respectively. b) Scores of adaptation and satisfaction at the present time were high in the high scoring group and the rising group. c) In the rising group, they were apt to have a good relationship with their husband, and regarded their family as more important than their job, and in the declining group, they were apt to tell of their husband's lack of understanding and zeal for their work more than the other groups.

Key words: longitudinal study, internal working models, adulthood, sense of adaptation, changeability

I. 目 的

生涯発達心理学が提唱され、成人期や老年期が発達心理学の対象になり、その発達課題や発達の变化についての研究が盛んになされるようになってい

る。成人期については Erikson や Levinson がその発達を包括的に論じる理論を提唱しており⁴⁾¹¹⁾、また職業経験を積むことによるキャリア発達についても多くの研究がなされている¹⁴⁾。1990年代から子育てを「親になる経験」ととらえ、親になること(特に母親になること)に伴う発達の变化についての実証的研究がなされているようになってい(柏木⁹⁾、氏家¹⁹⁾、小野寺¹³⁾)。但しそれらの研究のほ

* 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科
Graduate School of Health and Sports Science,
Juntendo University

とんどもは横断的研究や回顧的研究であり、異なった年代の被調査者を比較したり、あるいは年少の年代については後の時期に回顧的に得られたものをデータとして発達の変化を導くという方法がとられている。

山岸は看護専門学校卒業生に4年後初期成人期に縦断的検討を行い²³⁾、また看護短大卒業生にも対人的経験をめぐる要因について主として質問紙法によって縦断的研究を行ってきた²⁵⁾。それらの研究で取り上げた指標は、自他の認知や対人的経験に関する枠組み、現在及び過去の各時期の適応感に関するものであり、それらが青年期から成人期にかけてどのように変化するか²⁵⁾、またそこにかかわる要因は何か²³⁾²⁷⁾の観点から検討を行ってきた。

Bowlbyは乳児が養育者との相互作用から愛着を形成し、その愛着が内在化して愛着対象や自他の関係に対する主観的な信念や期待が構成される—その表象は内的作業モデル Internal Working Models (以後 IWM と略記) とされる—とする理論を提唱した²⁾。IWMは自他の有効性に関する対人的な枠組み—自分は他者から受入れられるのか、他者は頼ることができるのかという枠組み—であり、我々はそれに基づいて対人的情報を処理し対人的な行動をするとされる。つまり発達初期の愛着対象との相互作用に基づいて IWM が形成され、それに基づいて対人的経験が方向づけられ、その後の対人的行動や適応を規定するとされる。Bowlbyによれば、IWM形成の最も敏感な時期は6ヶ月から5才前後で、その後感受性を次第に減少させていき、加齢と共に構造的安定性・固定性を増していくとされる²⁾。

IWMの連続性については、多くの縦断的研究がなされ、近年は幼少期から青年期にまで至る長期の研究もなされるようになってきている(Zimmerman 他、1995¹¹⁾、Waters 他、2000¹²⁾、Hamilton 他、2000¹³⁾、Lewis 他、2000¹⁴⁾、Weinfeld、2000¹⁵⁾、Grossmann 他(2005)は長期にわたる縦断研究を編集している¹⁶⁾。日本では遠藤によるレビューがある¹⁷⁾。それらの研究は必ずしも一致した結果ではなく、早期の愛着の質とその後の IWM との連続性を報告するもの

(例えば Waters 他¹²⁾、Hamilton 他¹³⁾では、安定/不安定の2分類で、72%、77%が一致していた)と有意な連続性が見られない研究¹⁴⁾が混在している。なお成人期に至る研究はまだほとんど行われていない。Klohn & Beraの研究¹⁸⁾は質問紙法であり上記の研究とは測定法が異なっているが、31年間にわたる検討をし、52歳時に安定型、回避型の者は以前の時期においても他者との関係における暖かさや他者への不信、情緒的距離等の得点傾向は変わっておらず、安定型、回避型の差が長期にわたって見られることが示されている。

山岸の青年期から初期成人期に関する一連の研究も質問紙法によるものだが、時期が異なっても IWM に関する得点の相関はかなり高いこと、しかし変化する者もあること²³⁾²⁵⁾、生育の過程のとらえ方(過去の経験の認知)もとらえる時期が異なっても大きくは異ならないが、肯定的になったり否定的になったり様々に変化する者もあること²⁴⁾、母親のとらえ方は発達と共に肯定化したり多面的にとらえるようになる場合が多いこと²⁶⁾²⁷⁾等の結果が示されてきた。

本研究では更に年齢が進み、成人期中盤にさしかかっている女性を対象に縦断的な手法で検討する。青年期から初期成人期にかけては、就職して社会人になるという経験や結婚・出産という大きな環境の変化があったが、就職して20年近くなった時期の女性—社会人・職業人としての経験を積み、継続している者は中堅になり責任も重くなってきていたり、子どももいくらか成長し育児の真最中の者が多いと思われる時期(Levinsonによる「一家を構える時期」¹¹⁾に該当する)の者を対象に、そのような成人期の経験によって対人的枠組み(IWM)やそれと関連する対人的認知(エゴグラムや両親の養育態度の認知、重要な人)がどのように変化し、それらがどう関連しているのか、何が変化に関与しているのかについて、縦断的な手法を使って検討する。

II. 方 法

【被調査者】 1990年看護専門学校3年時に生育

史^{〔脚注1〕}を書いた50名(内41名が1991年の質問紙調査に回答—その結果については山岸(1994)²²⁾参照)の内連絡がとれた者に調査依頼を行った。それに回答した19名(回答率61.3%)の内、1991年の調査に回答していた15名が本研究の被調査者である(なおその内の9名、計11名には面接調査も実施している)。年齢は40~42才。看護師9名(内8名はパート職)、保健師1名、看護教員1名、会社員1名、専業主婦3名。15名中13名が既婚。既婚者は全員子どもがいる。

【調査時期】 質問紙調査—1回目 1991年7月 今回—2010年7月から8月。

面接調査—2010年8月から9月。

【手続き】 同窓会名簿に現住所を開示している者に調査の依頼をし、同意した者に質問紙を郵送して郵送法で回収した。質問紙の最後に面接の依頼をし、協力の意思を示した者と連絡をとり、日程の調整をして母校の一室(2名は本人の自宅近くのコーヒESHOP)で面接を行った。

【質問項目】

1991年の調査項目に準じた項目1)から4)と、1995年からつけ加えた5)8)、今回新たにつけ加えた6)7)から成る質問紙調査を行った。

1) 現在の対人的枠組み(IWM) 詫摩・戸田¹⁷⁾が Hazan&Shaver⁷⁾を参考に作成した IWM 尺度18項目(Secure, Ambivalent, Avoidantに該当する項目6ずつ)について5件法(とてもあてはまる5~全くあてはまらない1)で尋ねる。

2) エゴグラム 対人的態度を見るものとして5尺度の内批判的親CP, 養育的親NP, 大人A各10項目ずつ(杉田(1983)¹⁶⁾を一部改変したもの)について3件法(あてはまる3~あてはまらない1)で尋ねる。

3) 両親の養育態度 戸田¹⁸⁾の質問項目を参考にし

た14項目(母親, 父親それぞれの暖かさと統制, 全体的印象)について、「子どもの頃のお母さんとお父さんに関して次のことはどの位あてはまりますか」として5件法で答えてもらう。

4) 過去から現在の各時期の全体的適応感 1991年 ①幼少期 ②小学生時代 ③中学時代 ④高校時代 ⑤専門学校時代 ⑥現在の6時期, 2010年は1991年の①から⑤と, ⑥就職した頃 ⑦20代後半 ⑧30代前半 ⑨30代後半 ⑩現在の計10時期について、「どの時期にも楽しいこととつらいことの両方があったと思いますが、次の時期は全体としてどちらの思いの方が強いですか」として「とても楽しかった」「つらいこともあったが楽しかった」「どちらともいえない」「つらかった」の4つから選ばせる。

5) 時間的展望尺度 現在の適応状態をより詳しく見るために白井(1997)¹⁵⁾の時間的展望体験尺度の中の「現在の充実感」「過去の受容」「未来への希望」各5, 4, 4項目を用い、5件法で答えてもらう。

6) レジリエンス尺度 山岸他(2010)²⁸⁾の項目に Antonovsky¹⁾の首尾一貫項目の一部をつけ加えた29項目(新奇性追求・感情の統制・メタ認知・肯定的未来志向・楽観性・関係性・首尾一貫感覚の7尺度から構成)に対して5件法で回答する。

表1に1)2)3)5)6)の質問項目の例をあげた。

7) 現在の満足度 40才頃の女性にとって重要と考えられる領域を伊藤他(2003)⁸⁾の主観的幸福感等を参考に以下の9項目を設定し、満足度を5件法で答えてもらう。①生活全般②仕事の内容 ③仕事上の人間関係 ④配偶者との関係 ⑤子どもとの関係 ⑥家族との関係 ⑦経済的問題 ⑧自分の人間としての成長 ⑨その他で重要なこと(該当することがない場合はとばす様指示)

8) 自分にとって重要だったことに関する自由記述「今まで生きてきた過程を振り返って、現在のあなたに影響を与えていると思う重要なこと」「ここ数年の間にあったことで重要だったこと」「現在重要な人・その意味」について自由に記述してもらう。

【面接】 卒業後どのように過ごしてきたか、つらかったこと・大変だったこと、自分にとって重要だっ

〈脚注1〉

4つの時期(乳幼児期, 小学校時代, 中・高校時代, 高校卒業以降)それぞれに関し、1)どのような時期だったか、2)どんなことがあったか、3)まわりの人はどんな意味をもっていたかについてB4の用紙を4×3の欄に分割したものに、自由に記述してもらった。

表1 質問項目の例

IWM	
Secure	私は人に好かれやすい性質だと思う
Ambivalent	人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある。
Avoidant	どんなに困った時でも人には頼らない方だ。
エゴグラム	
批判性	良い、悪いをはっきりさせないと気がすまない方だ。
養護性	がっかりしている人がいたら、慰めたり元気づけてあげる。
現実性	何かする場合、他人の意見をきいたりよく調べてからする。
養育態度	
暖かさ	母親(父親)にやさしくしてもらった思い出があまり浮かばない。(逆転)
統制	母親(父親)は子どもに干渉して思うままにさせようとした。
時間的展望	
現在の充実感	毎日の生活が充実している。
過去の受容	過去のことはあまり思い出したくない。(逆転)
未来への希望	自分の将来は自分で切り開く自信がある。
レジリエンス	
新奇性	色々なことにチャレンジするのが好きだ
感情統制	動揺しても自分を落ち着かせることができる。
メタ認知	失敗した時自分のどこが悪かったか考える。
肯定的未来志向	これからの人生にいいことがきっとあると思う。
楽観性	何事もよい方に考える。
関係性	つらい時や悩んでいる時は、自分の気持ちを人に話したいと思う。
首尾一貫感覚	うまくいかないことも、その経験が後で役にたつと思う。

たこと、子育て・仕事の意味、生育の過程について特に印象的だったこと、重要だった人。自分は変わったか、親に対する気持ちは変わったか。今気にかかっていること、充実感を感じていること等、半構成的面接を行った。計40分～1時間程度。ICレコーダーに録音し、書き起こした。(なお本稿では子育て・仕事の意味についてのみ取り上げる)

【倫理的配慮】 順天堂大学スポーツ健康科学部研究等倫理委員会の承認を得た。

Ⅲ. 結果と考察

1. 2時期の各尺度の合成得点の算出

1)2)3)5)の各尺度については、これまでの研究で因子分析をくり返し、ほぼ仮定通りの結果が得られているため、仮定された項目ごとに合計点を算出した(安定得点、アンビバレント得点、回避得点、2.

批判性、養護性、現実性、3.母親の暖かさ、統制、父親の暖かさ、統制、5.現在の充実感、過去の受容、未来への希望)。IWMと時間的展望に関しては、更に各尺度を合計して総点を算出した(IWM総点 = Secure - (Ambivalent + Avoidant) / 2, 時間的展望総点 = 現在の充実感 + 過去の受容 + 未来への希望, それぞれ得点範囲は-24~24と13~65).

4)7)については個別の値と共に、全体的傾向を見るために平均値も算出した。

6)については山岸他(2010)で検討済みなので、下位尺度ごとに合計点を算出し、更にそれらの合計得点を「レジリエンス総点」とした。

2. 2時期の各尺度の合成得点の変化と相関

各合成得点の1991年と2010年の平均値(SD)と相関係数(Spearman)は表2の通り。生育過程の

各時期の適応感については度数分布を表3に示した。

母親の暖かさで有意差が見られ、1991年の方が高かったが(批判性・養護性は10%水準で有意)、他では有意差は見られず、19年間での全体的な変化は少ないといえる。2時点間の相関はIWM総点、Am, エゴグラム の3尺度、母親の暖かさは有意な相関が見られ、19年経っても以前の傾向と関連してしていることが示された。1991年と1995年間の相関(N=31, 山岸1997²³⁾)と比べると、4年後では全ての合成変量が.5から.8台で有意であったのに対し値が下がっており、関連が弱くなるものもあることが示された。但しCPは.634であり19年後の方が

値が高かった。エゴグラムのような性格特性の方がIWMより変わりにくいことが示された。1991-2010では母親の統制が無相関であったが、子育てをする中で母親が子供を統制することに関する考え方や感じ方が変わったと考えられる。

生育過程の各時期の適応感は「～時代」というかなり長期間の印象を「楽しさとつらさのどちらの思いの方が強い」として4つの選択肢から選ばせるという大まかなものであったが、分布に大きな異なりは見られなかった。2時期の評定が一致している者が61.3%で、2段階異なる者は延べ90(15×6時期)名中10名であり、その内5名は幼少期であっ

表2 1991年と2010年の相関と差の検定

	1991	2010	t検定(t値)		相関係数	
			1991-2010	1991-1995	1991-2010	1991-1995
IWM 総点	12.33(15.02)	8.60(18.11)			.522*	
Secure	21.67(3.98)	19.93(5.34)			.374	.758***
Ambivalent	16.00(5.08)	15.93(4.43)			.526*	.580***
Avoidant	15.00(5.36)	15.53(5.80)			.478+	.729***
CP (批判性)	21.53(3.76)	22.93(4.27)	1.87+		.670**	.634***
NP (養護性)	26.60(2.53)	25.73(2.34)	1.90+	2.25*	.783***	.849***
A (現実性)	23.13(2.39)	24.07(2.55)			.566*	.737***
母親 W	17.86(2.68)	16.36(3.63)	3.14**	2.66*	.653*	.731***
母親 C	6.50(1.87)	6.29(2.30)			.046	.513**
父親 W	22.13(3.34)	21.33(3.09)			.433	.813***
父親 C	8.87(1.73)	8.73(1.58)			.478+	.730***

W: 暖かさ C: 統制の弱さ * p<.05, ** p<.01, *** p<.001, + p<.10

表3 生育の過程の適応感

	とても楽しかった		つらい楽しかった		どちらともいえない		つらかった		平均		相関係数	計
	1991	2010	1991	2010	1991	2010	1991	2010	1991	2010		
幼少期	7	10	3	3	4	1	1	1	3.07	3.47	-.059	15
小学生時代	5	5	8	9	1	0	1	1	3.13	3.20	.544*	15
中学生時代	5	3	8	9	0	1	2	1	3.07	2.80	.501+	15
高校生時代	9	10	5	4	1	1	0	0	3.53	3.60	.172	15
専門学校時代	4	7	8	5	2	3	1	0	3.00	3.27	.207	15
就職した頃	0	2	11	11	3	1	1	1	2.67	2.93	.373	15

* p<.05 + p<.10

た。幼少期以外で異なるのは75名中5名(6.7%)で、19年経っても各時期の印象に大きなズレはなく、かなりの一貫性があるといえる。

3. IWM 総点の変化の様相

表4は1991年から2010年のIWM総点を上位から並べて順位の変化と得点変化を示したものである。得点差が小さく全体における位置がほとんど変わらない者が見られる一方、大きく変化した者も見られている。表5は1991年から2010年、及び1991年から1995年のIWM総点の変化量である。1991年から2010年の19年間では、10点以上変化した者は4名(26.7%)、半数近く(7名)が5点以上変化しており、4年後に比べると変化量が増えている。

4. IWM の変化量および現在の IWM と他の変数との関連

1991年から2010年のIWM総点の変化量と両時期にデータがある変数(エゴグラムと両親の態度)の変化量とに関連があるのかの検討を行った。有意な関連が見られたのは、NP(養護性)と.713($p < .01$)、A(現実性)と.609($p < .05$)であり、IWMが安定化している者は養護性と現実性が上昇していた。現在の生活の満足度、時間的展望、レジリエンスに関しては1991年には質問項目に入っていないため変化量のデータはないが、現在のそれらとIWM得点の変化量との関連に関して、レジリエンスの肯定的未来と.761($p < .001$)、楽観性と.541($p < .05$)の相関が見られ、肯定的志向性をもつ者は安定化していた。

現在のIWM総点(IWMの安定度)との間に有意な相関が見られたのは、時間的展望.770($p < .001$)、レジリエンス尺度の関係性.648($p < .01$)、レジリエンス総点.722($p < .01$)、生活満足度.552($p < .05$)であった。

IWMは肯定的楽観志向や他者からのサポートを得ようとする傾向というレジリエンスと関連し、また肯定的な時間的展望をもっているかや生活満足度とも関連していることが示された。表6に現在のIWMおよびIWMの変化量のどちらかで有意な相関が見られた変数との相関係数を示した。

5. 変化のタイプ分け

1991年と2010年のIWM総点の差及び両時期の得点のあり方から、次の4群を設定した。

高得点群 2時期共10点以上

上昇群 2010年の得点-1991年の得点 \geq 5点

下降群 2010年の得点-1991年の得点 \leq -5点

低得点群 2時期共マイナス得点

表5 2時期でのIWMの変化量(名)

	1991→2010	1991→1995
10以上	4(26.7%)	1(3.2%)
5以上10未満	3(20.0%)	7(22.6%)
3以上5未満	2(13.3%)	7(22.6%)
1以上3未満	2(13.3%)	9(29.0%)
1未満	0(0%)	6(19.4%)
変化なし	3(20.0%)	1(3.2%)
計	15(100%)	31(100%)

表4 IWM総点の変化の様相

1991	2010	得点差	1991	2010	得点差	1991	2010	得点差
①18.5(下降)	②14	-4.5	⑥6.5(上昇)	④11.5	5	⑩3(上昇)	⑦6	3
②18(下降)	⑩4.5	-13.5	⑦5.5(=)	⑩4.5		⑩3(下降)	⑮-18.5	-21.5
③16(下降)	⑤8.5	-7.5	⑧5.0	⑥7		⑬-3(=)	⑬-4	
④11.5(=)	③11.5		⑧5(上昇)	①17.5	12.5	⑭-3.5(上昇)	⑦6	9.5
⑤9(下降)	⑫-2	-11	⑩4.5(=)	⑩4.5		⑮-6.5(=)	⑭-6.5	

下降・上昇 太字 10以上 普通 5~10未満 () 3~5未満

表6 IWMの変化量及び現在のIWMと他の変数との関連

	NP(変化)	A(変化)	肯定的未来	楽観性	関係性	レジリエンス総点	時間的展望	生活満足度
IWM変化量	.713**	.609*	.761***	541*				
IWM2010					.648**	.722**	.770***	.522*

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表7 4群別の得点変化および現在の得点

	Case	2 時期の IWM 1991-2010		IWM の 変化量	IWM Se-Am-Av			Egogram 変化	時間的 展望	生活 満足度	レジリ エンス
高得点群	a	18.5	14	-4.5	-5	-1	0		60	4.75	94
	B	11.5	11.5	0	-1	0	-2	CP -3	56	3.50	91
上昇群	c	5	17.5	12.5	8	-6	-3	A +4	50	3.38	84
	D	-3.5	6	9.5	4	0	-11	NP +3 A +3	56	4.88	100
	E	6.5	11.5	5	1	-6	-2		52	4.00	96
下降群	f	3	-18.5	-21.5	-12	9	10	CP +4 NP -4	31	2.33	59
	g	18	4.5	-13.5	-8	8	3		52	4.00	90
	H	9	2	-7	-9	2	2	CP +4 A -3	42	2.78	90
	I	16	8.5	-7.5	-1	6	7	CP +3 NP -3	59	4.50	86
低得点群	j	-6.5	-6.5	0	-1	-6	4	A -3	50	4.25	73
	K	-3	-4	-1	1	-3	7		30	2.00	74

Case 名 小文字—質問紙のみ 大文字—面接も施行
Egogram の変化 3 点以上の変化

該当者は各2名, 3名, 4名, 2名(内1, 1, 2, 1名は質問紙調査のみに答えた被調査者)であった。

6. 変化のタイプと他の要因との関連

表7は4群別に質問項目から換算された各得点, 表8は面接調査や自由記述の中の「重要な他者」「仕事への思い」をまとめたものである。

エゴグラムに関して, 上昇群における現実性の上昇と, 下降群における批判性の上昇が見られている。現実性も批判性も2時期の相関は高かったが, 現実への理性的な対処とIWMの上昇, 自他に対する批判性・厳しさとIWMの下降の関連が示唆され

ている。また高得点群・上昇群は全体的に時間的展望やレジリエンス得点が高い一方, 下降群・低得点群では両者が低い者, また現在の生活満足度も低い者が見られている(半数の3名は最も低い得点である)。IWMの安定度が高いこと, 上昇することと現在の適応感との関連が示されている。

他者との関係や仕事に関しては, 上昇群は夫が「自分が置かれている状況をよく理解し援助してくれる」「自分を理解しようとしてくれている」と感じている。また仕事より家庭が重要と考えている者が多く, 「家庭があるから自分がある。仕事は家庭と比べるレベルではない。仕事はおまけ」「仕事は

表8 特徴ある群の重要な他者と仕事への思い

	case 名	IWM の変化	重要な人	仕事への思い(家庭への思い)
高得点群	a	18→13.5	夫・子供・両親・友人	言及なし
	B	11.5→11.5	夫—家庭の雰囲気が異なる。肯定的な記述少。子供が重要。夫より母親の方が大切かもしれない。	家族が一番 仕事にも充実感はあるが子供との時間を大切にしたい。いざとなれば仕事をやめる。
上昇群	c	5→17.5	夫—一番の理解者・協力者。夫と友人—私を「人を信じられる人」にしてくれた。子供—私たちの宝	言及なし
	D	-3.5→6	夫—自分を理解し、合わせてくれる。困ったことに関して援助してくれる。母性的な姑とのかかわりから協調的になる。家族—なくてはならない人、生きる全て	家庭が全て。「家庭があるから自分がある」仕事は おまけ。仕事と家庭は比べるレベルではない。
	E	6.5→11.5	夫の気持ちをわかろうとしてなかった。夫はわかろうとしてくれたと気づいた。前向きな考えの仲間達と出会い、影響を受けた。彼女みたいになりたいと思う。	仕事は生きがいというより、生活のため。家族との活動が楽しい。仕事では愚痴や不満の話が多くて気分が悪くなる。
下降群	f	3→-18.5	重要だったこと、影響を受けたことの欄は空白。重要な人としては家族をあげる(独身)	言及なし
	g	18→4.5	家族の他に友人の比重も高い。	仕事で得た経験から影響
	H	9→2	協力・共感してくれない夫がストレス。気がつかず、頼んでも応じてくれない夫への不満。2人の子どもが癒し・生きがい	仕事—生活の一部、本当の自分がいるという感じ。私らしさがだせる場、天職と感じている。
	I	16→8.5	夫—性格が正反対 それでよいのかもと言いながら不満も言っている。子育ての悩みや思いを共有してはいない。(一番大きい存在だった母親が昨年亡くなり、虚しい気持ちが続いている)	夫と子ども—運命共同体のような感じ。復帰してから仕事に充実感を感じている。自分の中で仕事は重要
低得点群	j	-6.5→-6.5	夫—すべての意味で必要と記述。重要だったことの欄は空白	言及なし
	K	-3→-4	重要な人—思い当たる人はいない。一人で心理的に誰にも頼らずに生きてきた。話してもわかってもらえないと思うので人に話さず。	自分らしくいられる場を模索中。

Case 名 小文字—質問紙のみ 大文字—面接も施行

生きがいというより、生活のため」と述べている(高得点群のBも「仕事にも充実感はあるが、家族が一番重要。いざとなれば仕事をやめる」と述べている)。また2名が共通してプラス要因をもつ同性の者(「姑」「前向きな考え方をする友人」)からの

影響を受けたことを語っている。

下降群の中の面接もした者2名は、面接の中で夫への不満、理解を得られないことを語っていた(「両立が大変なのに、気がつかず、言っても応じてくれない」「子育てへの悩みを共有してくれず、働く

ことへの理解もしてくれない)」。ソーシャル・サポートの重要な源の夫からそれが得られない不満やストレスが述べられていた。一方他群に比べて仕事に対する熱意を述べる者が多いという特徴が見られた(「仕事—ストレス発散の間でもあるし、私らしさが出せる場。本当の自分がいるという感じが得られ、天職と感じている」「子育てに専念していた頃はそれなりに楽しかったが、充実感がなかった。仕事に復帰してからは充実感でいっぱい。一生懸命やっている。自分の中で仕事はとても重要」)。

夫の理解と援助がIWM得点を上昇させ、家族の重要性をより認識させる一方、夫への不満やストレスはIWM得点を下降させ、家族以外に充実感を求める志向を生じさせる可能性が示唆されている。但し夫以外の様々なソーシャル・サポートの提供者との関係や、外的状況の変化等が関与している可能性もある。

IV. 結 論

本研究より以下のことが明らかになった。

4年後の相関より値は下がるが多かったが、19年経っても以前の傾向と関連している変数も多いたことが示された。エゴグラムのような性格特性の方がIWMより変わりにくいことが示された。1991-2010では母親の統制が無相関であったが、子育てをする中で母親が子供を統制することに関する考え方や感じ方が変わったと考えられる。生育過程の各時期の適応感に関しては、19年経っても幼少期以外は大きく変わる者は少なかった。

IWM総点の19年間での変化に関しては、得点差が小さく全体における位置がほとんど変わらない者が見られる一方、大きく変化した者も見られ、半数近く(7名)が5点以上変化しており、4年後に比べると変化量が増えている。

変化のタイプとして高得点群/上昇群/下降群/低得点群の4群をもうけ、4群別に他の得点や面接調査・自由記述から得られた特徴を検討したところ、1) 上昇群と下降群はエゴグラムの批判性と現実性で異なる 2) 高得点群と上昇群は現在の適応がよ

い 3) 上昇群は夫との関係がよく、仕事より家庭が重要と考えている者が多いのに対し、下降群は夫の理解が得られないことが語られ、他群に比べて仕事に対する熱意を述べる者が多いという特徴が見られた。

本稿ではIWMと関連する変数の縦断的变化や変化の関連の検討をおこない、どのような経験が変化のタイプと関連するのかを重要な他者や仕事への思いを中心に分析を行った。生育史の記述や面接での語りを使ったより詳細な分析—生育の過程でどのような経験をしてきたか、夫以外の様々なソーシャル・サポートの提供者との関係や外的状況の変化等も含めた包括的な分析については、稿を改めて述べようと思う。

【注】

本研究は平成22年度～25年度日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)(代表研究者 山岸明子)を受けた。本研究の一部は日本発達心理学会第22回大会(2011)及び日本教育心理学会第53回総会(2011)で発表した。

調査にご協力いただき、また研究誌にその結果を公刊することを了承して下さった被調査者の方々に心より感謝いたします。

文 献

- 1) Antonovsky, A. (1987/2001). 健康の謎を解く—ストレス対処と健康保持のメカニズム. 山崎喜比古・吉井清子訳 有信堂.
- 2) Bowlby, J. (1973/1977). 母子関係の理論Ⅱ. 分離不安. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子訳. 岩崎学術出版社. Attachment and Loss. Vol. 2 Separation. Basic Books: NY.
- 3) 遠藤利彦 (2007). アタッチメント理論とその実証研究を俯瞰する. 数井みゆき・遠藤利彦(編) アタッチメントと臨床領域 ミネルヴァ書房 1-45.
- 4) Erikson, E. H. (1950/1963). 幼児期と社会 Childhood and Society.

- 5) Grossman, K. E., Grossman, K., & Waters, E. (2005). Attachment from infancy to adulthood: Major longitudinal studies. The Guilford Press: New York.
- 6) Hamilton, C. E. (2000). Continuity and discontinuity of attachment from infancy through adolescence. *Child Development*, 71-3, 690-694.
- 7) Hazan, C., & Shaver, P. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality & Social Psychology*, 1987, 52, 511-524.
- 8) 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至(2003). 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. *心理学研究*, 74-3, 276-281.
- 9) 柏木恵子・若松素子(1994). “親となる”ことによる人格発達—生涯発達の視点から親を研究する試み—. *発達心理学研究*, 5, 72-83.
- 10) Klohnen, E. C., & Bera, S. (1998). Behavioral and experiential patterns of avoidantly and securely attached women across adulthood: A 31-year longitudinal study. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 211-223.
- 11) Levinson, D. J. (1978/1992). ライフサイクルの心理学 南博訳 講談社 *The Four Seasons of Men's Life*.
- 12) Lewis, M., Feiring, C. & Rosenthal, S. (2000). Attachment over time. *Child Development*, 71-3, 707-720.
- 13) 小野寺敦子(2003). 親になることによる自己概念の変化 *発達心理学研究*, 14-2, 180-190.
- 14) Schein, E. H. (1978/1991). キャリア・ダイナミクス—キャリアとは生涯を通しての人間の生き方・表現である 白桃書房.
- 15) 白井利明(1997). 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房.
- 16) 杉田峰康(1983). こじれる人間関係 創元社.
- 17) 詫摩武俊・戸田弘二(1988). 愛着理論からみた青年の対人態度:成人版愛着スタイル尺度作成の試み. *東京都立大学人文学報*, 196, 1-16.
- 18) 戸田弘二(1991). アタッチメントとその後の人間関係 社会性の発達心理学. 繁多 進他編 福村出版, 108-22.
- 19) 氏家達夫(1996). 親になるプロセス 金子書房.
- 20) Waters, E., Merrick, S., Treboux, D., Crowell, J., & Albersheim, L. (2000). Attachment security in infancy and early adulthood: A twenty-year longitudinal study. *Child Development*, 71-3, 684-689.
- 21) Weinfield, N. S., Stroufe, L. A., & Egeland, B. (2000). Attachment from infancy to early adulthood in a high-risk sample: Continuity, discontinuity, and their correlates. *Child Development*, 71-3, 695-702.
- 22) 山岸明子(1994). 女子青年の内的作業モデルと過去から現在の対人的経験との関連. *順天堂医療短期大学紀要*, 5, 52-63.
- 23) 山岸明子(1997). 青年後期から成人期初期の内的作業モデル:縦断的研究. *発達心理学研究*, 8, 206-217.
- 24) 山岸明子(2005). 青年後期と成人期初期に記述された生育史と対人的枠組みの変化との関連—7年間の縦断的研究—. *青年心理学研究*, 17, 15-26.
- 25) 山岸明子(2006). 対人的枠組みと過去から現在の対人的経験に関する縦断的研究 風間書房.
- 26) 山岸明子・井森澄江(2008). 母親認知の縦断的变化—青年期から成人期にかけて—. *医療看護研究*, 4, 20-28.
- 27) 山岸明子(2009). 成人期女性の現在の母親認知と青年期の母親認知の関連, 及びその規定要因. *青年心理学研究*, 21, 53-68.
- 28) 山岸明子・寺岡三左子・吉武幸恵(2010). 看護援助実習の受けとめ方と resilience (精神的回復力)及び自尊心との関連. *医療看護研究*, 6, 1-10.

(平成24年7月5日 受付)
(平成24年8月29日 受理)